

翻訳

メルヘンの意味について¹

ヘルマン・バウジンガー (著)

大野寿子 (訳)

ビーダーマイヤー期以来、とりわけユーゲントシュティール以降、メルヘン²を^{アレゴリー}寓意的に表現している図像が多数存在している。そのほとんどは、波乱に満ち鬱蒼とした魔法の森へとたった一人引き込まれてしまい、夢見がちな目をしてはにかむ、年若い少女の姿で描かれている。とはいえ実はその森は、その少女を保護しつつ取り巻いている。つまりその風景は、危険と約束から形成されているのである。我々の抱くイメージは、そこから大きくは外れているわけではない。しかしながら実のところその物言わぬ図像は、いわゆるメルヘンの特需景気³とは、おかしな矛盾を呈している。手つかずの風景が、数千もの観光客の宿泊を機に一気に宣伝されてしまうという、あのツーリズム・パンフレットが引き起こす現象とよく似ている。この物言わぬメルヘン〔^{アレゴリー}寓意たる少女〕は、自分が十分に注目を浴びていないと愚痴をこぼす必要などないのである。

今や〔西ドイツの〕半ダースほどの出版社が、世界中のメルヘンを自

¹ テキストは Hermann Bausinger が1985年（西ドイツ時代）に執筆した Zur Bedeutung der Märchen である（訳者解説において後述）。

² ドイツ語の Märchen は、「メルヘン」という表記で日本語に定着して久しい。Märchen はもともとは「短いお話」という意味であり、「童話」、「おとぎ話」、「昔話」だけでなく、「うわさ話」、「笑い話」や「ほら話」をも含意しうる語である。しかし日本人にとって「メルヘン」というカタカナには、「ふわふわした」、「乙女チック」、「お花畑のようなイメージ」、「ピンク」、「フリルいっぱいのかわいいお洋服のイメージ」、「水玉模様」、「草原の風景」といった、いわゆる乙女チックなイメージが付随している場合が多い。また、Märchen が常に子ども向けの「童話」のみを指すわけでもない。したがってここでは、付随したイメージに左右されることなくよりニュートラルにとらえるべく、原語発音に近い「メルヘン」と記す。大野寿子『黒い森のグリム—ドイツ的なフォークローア—【普及版】』、郁文堂、2010年、Ⅲ頁参照。

³ 猫も杓子もメルヘンを取り立て、それに乗っかろうとしていること。

社で主要商品化している。メルヒェン朗読カセット⁴やメルヒェン映画は、ニーズの高い子供用メディアでもある。ストーリー・テリングのレッスンコースがあり、プロのメルヒェンの語り手に報酬を支払う省庁もある。ヨーロッパのメルヒェン協会は、自分たちの催しに、ほぼ千人規模の人々を毎年動員している。世界中の数百という研究者が、『メルヒェン百科事典』編纂⁵に協力している。メルヒェンのモチーフは、広告と風刺画^{カリカチュア}では重要である。たとえば10年前〔1975年〕、連邦首相ヴィリー・ブランド（Willy Brandt, 1913-1992）によって、「ドイツ教養の森の赤ずきん」と呼ばれたあのフランツ＝ヨーゼフ・シュトラウス（Franz-Josef Strauß, 1915-1988）は、今となっては別の登場人物の役割を演じている。もちろんそれは、バイエルンの森から、ボンに住むプファルツ出身のおばさんの家を目指す、あのオオカミの役割である。⁶

雑誌と新聞がメルヒェンによせる関心は、このようなあてこすりをはるかに超えている。週刊誌『シュピーゲル』（Der Spiegel）はごく最近、メルヒェンの祖先が石器時代へ遡るか、それとも17、18世紀までかといった、いわゆるフェイクニュースの文章に磨きをかけていた。そして昨夏〔1984年夏〕の新聞では、ネス湖（Loch Ness）の怪物ネッシーの代わりに、ベ

⁴ 磁気テープメディア「(コンパクト) カセットテープ」のこと。CD以前、特に本論考が執筆された80年代には、音楽や朗読等の録音に幅広く使用された。

⁵ ドイツの伝承文学研究者クルト・ランケ（Kurt Ranke, 1908-1985）により1960年代に計画され、ドイツ・ゲッティンゲン大学科学アカデミーを編集拠点とし、2015年によりやく完成した15巻本の『メルヒェン百科事典』（Enzyklopädie des Märchens）のことである。本著者ヘルマン・パウジンガーも寄稿しており、本論考執筆時は編纂中の段階であった。

⁶ 本論考が執筆刊行された1985年はまだ東西分割の時代であり（ベルリンの壁崩壊が1989年11月9日、東西ドイツ統一が1990年10月3日）、西ドイツの首都ボンには連邦議会が存在した。当時の連邦首相ヘルムート・コール（Helmut Kohl, 1930-2017、在任1982-1998）は、ラインラント＝プファルツ州ルートヴィヒスハーフェン・アム・ラインの出身であることから、この「おばさん」とは当時のコール首相のことと思われる。コールに対するシュトラウス（バイエルン州ミュンヘン出身）の批判的態度を著者が風刺して、おばさんの命を狙う「オオカミ」になぞらえている。1980年代の西ドイツの読者には、シニカルな笑いを誘うフレーズであっただろう。

ネチアにおいて展開されたという裁判訴訟の報道が取りざたされた。⁷ 被告人は悪いオオカミである。告発理由は、おばあさんと赤ずきんへの詐偽と暴行、二つの殺人行為、とりわけ残忍な振る舞いである。その訴訟はおそらく、動物愛護者たちからまだ差し止められていなければ、煌びやかでレトリックの効いたショーとなり、司法上の遊びめいたパンチの応酬となり得るだろう。しかしながら、このバカげた企画はそれでも、ほんの少しの真剣さを背景として抱えている。この告発人は、道楽めいた奇抜なメルヒェン研究者であり、17世紀のフランスではじめて記録された素朴な威嚇の物語^{ゲシヒテ}⁸の背後に、印欧語諸民族の謎に満ちた加入儀礼が存在すると推測している。

* * * * *

メルヒェンの魅力とは、明確かつ見え見えで簡単に理解しうる物語^{ゲシヒテ}の進行と、物語^{ゲシヒテ}を平凡な現実から逸脱させてしまう説明不能なもの（あるいは不可解なもの）との間の緊張と対立の関係の中に存在する。メルヒェンとは、己自身を越えて指向する、「単純素朴な物語^{ゲシヒテ}」(einfache Geschichten)なのである。フランツ・フューマン (Franz Fühmann, 1922-1984) の詩の一

⁷ 同訴訟に対してその後、弁護士ドメニコ・カルポーニ・シッター (Domenico Carponi Schittar) がベネチアの法廷で、赤ずきんに登場するオオカミの無実を訴えたというニュースが、ドイツの新聞『ツァイト』(Die Zeit) の1984年12月21日 (52号) に「赤ずきん事件」(Die Affäre Rotkäppchen) というタイトルで掲載されている。同記事によればシッターは、太古の諸神話の儀礼的象徴としてのオオカミの役割とメルヒェンの関係性に言及し、被告のオオカミが実際には、暴力、殺人やレイプといった刑事事件を犯してはいないと弁護した。1980年代はまさに、メルヒェンの神話学的解釈および心理学的解釈が浸透していった時代である。『ツァイト』では、悪いオオカミ事件の本当の犯人は、赤ずきん話を信じた人々の方であり、メルヒェンは原始的人間の生を映し出し、恐怖を克服する方法を指し示すと結論付けていた (Spiegel Online archiv では残念ながら同記事の発見には至らず調査継続中)。Zeit Online Archiv. <https://www.zeit.de/1984/52/die-affaere-rotkaeppchen> 参照 (2020年12月3日)。

⁸ シャルル・ペロー (Charles Perrault, 1628-1703) が1697年に出版した『教訓を施した過ぎし日の物語あるいはメルヒェン (ガチョウおばさんの話)』(Histoires ou Contes du temps passé, avec des moralités: Contes de ma Mère l'Oye, 通称ペロー童話) のこと。

つに、「メルヒェンの方向性」(Die Richtung der Märchen) というタイトルが掲げられている。その冒頭は以下の通りである。

メルヒェンの方向性：より深く、常に
大地を目指し、より世俗的で、物事の根幹へ
核心へと近づく

我々は、メルヒェンを収集し記録し出版して以来、このように感じてきたのだ。しかしながら、メルヒェンの本質(Wesen)とはいったい何なのか？

グリム兄弟⁹がメルヒェンの意味について考えたとき、彼らは特にそれがある遠い過去の中に見出した。ヴィルヘルム・グリムはこう記した。「その意味はとうの昔に失われているが、メルヒェンが同時に『不可思議なもの』(dem Wunderbaren) を得る喜びを満たしている間は、かろうじて知覚され、その内実を己に与えている。その『不可思議なもの』が、内実なき空想の単なる色彩の戯れであったことは決してない。」この兄弟は、今日なお発見しうる、砕け散った宝石のとりどりの欠片という表象をよく使用する。この宝石とは、彼らの見解によれば、メルヒェンそのものが参照を要求している、古い神々の神話のことだった。

グリム兄弟は幸運なことに、眼前に見出されたものにあまりにも誠実であり、物語の^{ゲシヒテ}素朴性にもまた、あまりにも惚れこみすぎていた。そのため、

⁹ 歴史上ではヤーコプ・グリム (Jacob Grimm, 1785-1863) とヴィルヘルム・グリム (Wilhelm Grimm, 1786-1859) のことであり、伝承文学を収集し、『子供と家庭のメルヒェン集』(Kinder- und Hausmärchen、通称グリム童話) を出版した (第1巻第1版1812年・第2巻第1版1815年、第2版1819年、第3版1837年、第4版1840年、第5版1843年、第6版1850年、第7版1857年)。通し番号が第7版では「メルヒェン」というジャンルで200番まで存在する (その他に「子供の聖人伝」というジャンルで10話収録されている)。以下、Kinder- und Hausmärchen の略称KHMと通し番号を丸カッコ内に表記していく。前出の「赤ずきん」はグリム童話26番目の話なので、KHM26となる。

彼らが自分たちの神話論推奨のために、物語の素朴性を犠牲にしまうことなどはなかった。ヴィルヘルム・グリムは、「メルヒェンというものは、いうならば、かつて意味を持っていたものと戯れるのだ」と綴っている。ヤーコプとヴィルヘルムは、この美しい詩^{ポエジー}的な戯れを正当に評価しており、その詩^{ポエジー}的な戯れに没頭し、メルヒェンをゆだねたのだ。ありがたいことに彼らは、かの神話学的解釈に左右されることなど、まったく、あるいはほとんどなかった。しかしながら、その神話学的解釈、つまり沈潜してしまった神話への指向性は、メルヒェン解釈者たちの視線を1世紀以上の間釘付けにしてきた。

赤ずきんは——たとえば、我々の世紀〔20世紀〕の中庸においてなお読まれ得たのだが——「受け継がれた法を探す者」であり、しかも、「赤は、ゲルマン民族において、受け継がれた掟^{シンボル}の象徴性」であったという。「生命の根源」〔＝おばあさん〕に生贄が一人捧げられることが、「パンとワイン」によって暗示されている。おばあさんの家にあるオークの木々は、聖なるノルン三女神^{ナッツ}¹⁰の象徴である。堅果^{ナッツ}の木の生垣は、魂が正道にあったことを示唆している。というのも、堅果^{ナッツ}の木の生垣とは、古代ゲルマン民族において、人民集会（Thing）の会場の囲いとなっていたからだ。オオカミは、地下世界の番をするヘル¹¹のイヌである。そしてオオカミは、同時に月でもある。夕焼け〔＝赤ずきん〕の後をこっそり追い、太陽〔＝おばあさん〕の前に立ちはだかるのである。この図像の中に暗示されたのは、いわゆる日食であった。

このような諸解釈の不具合は、国際的財産としてのメルヒェンの偏狭な

¹⁰ 北欧ゲルマン神話に登場する運命の三女神で、ウルズ（運命あるいは死）、ヴェルダンディ（成功者あるいは現在）、スクルド（責務あるいは未来）のこと。

¹¹ Hel あるいは Hela ともいい、北欧ゲルマン神話における死者世界を支配する女神。ヘル¹¹の館のあるヘルヘイムの入口となる洞窟には、番犬ガルム（Garm）がつかがれている。胸元に死者の血が付いており、しばしば、ロキがもうけたフェニルオオカミと同一視される。

ゲルマン化や、引き合いに出される神話学的図像の恣意性にのみ存在するわけではない。何よりもまずその神話学的図像がメルヒェン自身を裏切り、^{ゲシヒテ}物語をありのままにさせてはおかない点に存在するのである。

* * * * *

マックス・フリッシュ (Max Frisch, 1911-1991) は、自身の長編小説の中で、メキシコの死者慰霊日¹²の風習のことを書いている。「〔……〕幾度となく風に乗って、とても強く香ってくる。女たちは黄色い花々をむしり取り、それらを死者たちに向かってまき散らす。たとえば、野菜を下ごしらえするかのごときお勤めの一つ。だらしがないというわけでもない。とはいえ、不要な手振りもなく、強調もなく、ムードもなければ、ここで象徴的な何かが意図されているような、芝居がかった言葉もない。」そして彼はこう付け加える。「決して意図されたわけじゃない。単にこしらえられただけだ。」

ある一つの風習にマックス・フリッシュが与えたこの特徴描写は、メルヒェンにも向けられ得る。また、その語り手が「語る」ということを、学術的な話術教育や集団療法の枠組みではなく、耳を澄まし物語するという行為を通して学んだとすれば、メルヒェンの語り手たちにも男女を問わず向けられ得よう。メルヒェンは^{シンボル}象徴性を内包している、否、メルヒェンが^{シンボル}象徴性そのものなのだ。しかしメルヒェンは、何か決まったものを「意図する」わけではない。ヴィルヘルム・グリムはメルヒェンを、「誰もその深さを知らないが、誰もがそこから自身の欲望を汲み取るという一つの泉」にたとえた。メルヒェンの^{シンボル}象徴性は解釈を、それも、まったくもって種々様々な解釈を可能にする。しかし^{シンボル}象徴性それ自体は、「いかなる解釈よりも、結局優れたままであり続ける」のだ。

¹² キリスト教文化圏においては、教会歴の最後、すなわちアドヴェントの直前の日曜日のことを示す。

このような事態により、メルヒェンをある一つの体系の証拠と見なしてしまう「体系的」解釈すべてを、不快と言わざるを得ない。その際に、叙階階梯や発展階梯の人智学的システムが問題となっていようが、(精神分析治療患者の実生活からすくい取られてしまった) 無意識的プロセスの、一般的かつ精神分析的システムが問題となっていようが、それはどうでもよいのである。論者は、ブルーノ・ベッテルハイム (Bruno Bettelheim, 1903-1990) のあの重要文献を、この批判的 パースペクティヴ 視座に取り入れる。理由は、あらゆる表面的な純化作戦 (Reinigungsmanöver) に対する、ベッテルハイムの以下の主張にある。メルヒェンというものは、子供たちに救いの手を差し伸べる。そのヴィジョンの極端さ、筋の性急さ、否、その残酷性でさえ、「己の無意識の混沌とした緊張状態を克服」するために、子供たちに救いの手を差し伸べるのである。しかしながらベッテルハイムは、個々のメルヒェンの具体的解釈において、それらを限定し、まさに教科書通りの分析的位置関係に固着させてしまってもいる。

それはたとえば、以下の通りである。「赤ずきんは、いわゆる人間的な熱情を、口唇欲求や攻撃性、思春期の性的願望を物語っている。成熟しつつある子供の洗練された口唇性¹³ [=赤ずきんがおばあさんに持っていく良質な食事] を、進行しつつある人肉嗜食の形式 [=おばあさんと小さな少女をガツガツ食べるオオカミ] に、対置させているのである。」赤ずきんは、「芽生えつつある自分の性欲に対し、情緒的にまだ未成熟なのである。」だから赤ずきんは、オオカミがおばあさんのところに到達するための、十分な助言をオオカミに与えてしまう。それによって、いわゆる女性対女性という恋のライバル関係が、回避されてしまうのである。エディプスコンプレックス¹⁴に基づくベッテルハイムの構図の中では、おばあさんと母

¹³ ジグムント・フロイト (Sigmund Freud, 1856-1939) の心理性的発達理論に基づいた表現と思われる。子供の成長には (リビドーに照らして)、口唇期、肛門期、男根期、潜在期、性器期の五つの段階が存在しており、口唇期はその最初の階梯である。

親は、ごちゃまぜにされている。父親、いわゆる男性的原理も、赤ずきんが誘惑されそうになるオオカミと獵師という、二重の形象内で衝突している。ベッテルハイムはこの脇役たちに、「責任を自覚し救いをもたらす強い」父親像という機能を、割り当てているのである。

そのような固定化がどんなに徹底的になされても、ベッテルハイム独特の以下の確言が引き合いに出される。「すべての優れたメルヒェンは、いくつもの局面においてたった一つの意味を持つ。そして子供だけが、まさにどの瞬間どの意味が自分のために重要であるのかを、自ずと知りえるのである。」

しかしながら、メルヒェンの多様な意味の手がかりをつかみ、おそらくそこから、メルヒェンの意味認識のための実体を絞り出せる可能性は、どのくらい存在するのだろうか？その基本的前提は、論者の考えでは以下の通りである。^{ゲシヒテ}物語が、それが語られたまま素直に受け取られること、そして、その物語がまったく別の^{ゲシヒテ}物語へと置き換えられたりしないこと。それに相応して、諸解釈とは単純かつ素朴であらねばならず、己の沈思な感性にうっとりしてしまうような、感情のうずきであってはならない。これ以外の基本的前提として、あらゆる解釈を引き離しうる「^{シンボル}象徴的なもの」(das Symbolische)の優位性の承認が挙げられる。つまり、常に適応性の問題であるといしか言いようがない。

これよりごく手短に、次の三つの適応性を試してみることにする。

①メルヒェンにおける不安と出発 (Angst und Aufbruch im Märchen)

②メルヒェンにおける病と死 (Krankheit und Tod im Märchen)

¹⁴ 男根期はエディプス期とも呼ばれる。この時期に特に男児が、母親を異性と見なし愛情対象にしつつ、父親を自身と同一視したり (強くなろうとするのもこの傾向の一つ)、父親を排除しようとしたりする現象のこと。知らずに父を殺し母と交わったギリシア悲劇『オイディプス (エディプス)』にちなんだ名称。

③メルヒェンにおける幸福とモラル (Glück und Moral im Märchen)

* * * * *

メルヒェンは、150年ほど前〔19世紀初頭〕から、ある意味ちやほやされてきたジャンルである。メルヒェンはつまり、〔学術的〕批評者をあまり見つけてこなかったのだ。しかし、ある特定の位置価値の中で、メルヒェンへの総攻撃を主導してきた二つの批評点が存在する。

その一つが、メルヒェンの中に散見され、否、尾ひれを付けて語られ、子供の野蛮化を引き起こすとされた、残酷性に対する批判である。この論拠という意味で、1945年以降の軍事政権¹⁵が、教科書内のメルヒェンの割り当てを制限するよう強く求めた件が、引き合いに出される。

もう一つは、まったく反対の方向性を有する。すなわちメルヒェンは——特に1970年頃幾度となくこう説かれた——過去の時代遅れな心情的価値観を養った。つまり、文句すら言えず耐え忍ぶ女性から、しつけられた子供たちの味気ない従順から、同一性を指向するメルヒェンのストーリーから、別れを告げるときが来たということだ。

この二つの批評は、①の「不安と出発」のテーマと関わってしかるべきである。恐怖一杯の場面が、実際に数多く存在する。つまりメルヒェンは、

¹⁵ 第二次世界大戦の敗戦国であるドイツは、1945年7月のポツダム会議以降、英米仏ソによる分割統治下におかれ、非ナチ化と非武装化が推進された。しかしながら、英米仏占領地区とソ連占領地区の間の亀裂修復はかなわず、1949年5月23日、西側（英米仏）統治諸州にドイツ連邦共和国（西ドイツ）が、同年10月7日にソ連統治諸州にドイツ民主共和国（東ドイツ）が成立する。したがって1945年以降の「軍事政権」とは、非武装化政策下における東西冷戦の最前線としての軍事政権と捉えるべきであり、厳密に言えば、1955年のNATO（北大西洋条約機構）加盟を契機とした、主権完全回復後に行った再軍備以降と見なす方が本来的である。とはいえ第二次世界大戦中は、グリム童話をはじめとするメルヒェンが、民族至上主義を掲げるナチズムに利用されてしまった。メルヒェン（あるいはグリム童話）の脱イデオロギー化は、戦後に起こったナチズムへの反動によるということが、むしろ「1945年以降」という表現に込められていると言えよう。

残酷性のみならず、貧困、飢餓、苦境、遺棄〔子捨て^{ニグレクト}〕、放置、孤立というものを心得ている。メルヒェンの登場人物のこのような「見捨てられ」〔＝ほったらかされること〕は、不安につながりさえしなければ、子供を寄る辺なき悲惨な状態へと陥れることはないなどと言えるのか？ある論争において、フェリシタス・ベッツ (Felicita Betz) がこの問題に言及した。「子供というものは、結局不安を抱えている——しかしメルヒェンは、そのためのイメージを提供する。」つまりメルヒェンは、この不安が無視されることなく、真摯に受け止められるよう配慮しているというのだ。そして、不安が克服されるということを、模範的に提示する。活力を奪ってしまうような不安から逃れるもっとも重要な行動とは、初めの一步を踏み出すこと、すなわち出発することなのである。

境遇というものが、いかに瑣末視され感情的に提示されようとも、メルヒェンを単なる同一性から遠ざけてくれる、出発の気分^{ムード}というものが存在するのである。この関連において、希望の哲学でメルヒェンに重要な場を与えたエルンスト・ブロッホ (Ernst Bloch, 1885-1977)¹⁶を想起するのは、当然のなりゆきである。メルヒェンの語り口はこうである——「昔あるところに」(Es war einmal)——これは遡及的であり、無拘束的な時代超越性(Unverbindlich Zeitlose)の中へと一步後退するかのようである。彼が、「どなたでもお客」(jeder zu Gast)¹⁷となっているという、「昔あるところにいた娼婦」(Hure-Es-war-einmal) について語ったとき、ヴァルター・ベンヤ

¹⁶ ブロッホは後述のベンヤミンとも交友があり、ライプツィヒ大学 (当時東ドイツ) に就任していたが (1948年)、ベルリンの壁が建設された1961年に西ドイツを旅行し、そのままどまり、チュービンゲン大学 (当時西ドイツ) の教授に就任した経緯を有する (チュービンゲンにて1977年に死去)。本論者ヘルマン・パウジンガーが、チュービンゲン大学の教授に就任したのは1960年のことであり、ルートヴィヒ・ウーラント研究所所長を定年退職する1992年まで続けていたことから、ブロッホと同僚としての交流があったと推察される。

¹⁷ KHM31「手なし娘」(Das mädchen ohne Hande) に登場する、「どなたでもお泊りはただ」(Hier wohnt ein jeder frei) という森の中の小さな家を想起しうる表現である。

ミン (Walter Benjamin, 1892-1940) がそう感じたという。ブロッホは「昔あるところに」という表現の遍在を、ポジティブな方向性へと転じた。「これは、過ぎ去ったということをメルヒェン風に表してるだけでなく、より多彩でより軽やかで重力を脱した、『どこか別のところ』をも意味している。」メルヒェンはブロッホにとって、未来へと向かう構想の一つであり、「前進に向けた夜明け」の一例である。その中核に存在するのは、彼にとって、勇敢なちびの仕立て屋 (KHM20) や親指小僧 (KHM37) のメルヒェンのように、新鮮で若々しい行為を通して願いが実現されてゆくメルヒェンなのである。

ブロッホは——老人でありながら、生涯を通して信じがたいくらい「少年」であった——かつて、自身が「出発」したはずみから、目的地を越えて連れて行かれることを己に許してしまった。¹⁸ 彼はヘンゼルとグレーテル (KHM15) を、すぐさま在宅状態から「突破」させることで、冒険メルヒェンのモデルと見なした。とはいえ他方——彼のそこが嘲弄的に非難されたのだが——二人は実のところは〔家から〕追い出されている。しかしながら、突破しようが追い出されようが、そこがそんなに本質的なのだろうか？ どちらにしても、根本的な位置関係は立ち去ることであり、それは常に「出発」であり、また「離脱」でもある。あの赤ずきんですら、やっぱり道をそれてしまう。そして、物言わぬ忍耐の模範たる灰かぶり^{シンデレラ}は、禁じられた祝宴へと忍び足で向かう。メルヒェンの登場人物とは、むろん援助を必要としている。そして多くの場合その援助者とは、そのような離脱を成就させる人物、すなわち、両親か片親なのである。

¹⁸ 注16参照。本文章は、著者のブロッホ回想と見なしうる。ブロッホは1961年の西ドイツ旅行時にパイロイト音楽祭を訪れており、それが、東ドイツから西ドイツへの移住のきっかけだったと言われている。ライプツィヒから見てチュービンゲンは、パイロイトをはさんで遥か西南方向にあることから、彼が西ドイツ旅行に「出発」し、「目的地」(の一つ) だったパイロイトを「越えて」、遥か西南の地チュービンゲンへと結局「連れて行かれ」たことを示唆していると思われる。訳者解説参照のこと。

多くのメルヒェンは、両親と子供の葛藤、あるいはより簡単に言えば、両親と子供との離別を題材としている。メルヒェンの50%では——よくそう言われているのだが——父親と息子との葛藤が問題となっている。フロイト¹⁹の以下の認識を適用するなら、その関心の割合はおそらくもっと高いだろう。『昔あるところに王様と王妃様がいた』ではじまる多くのメルヒェンが語ろうとしているのは、結局、『昔あるところに父親と母親がいた』ということ」なのだ。メルヒェンとは「成熟経験」そのものであり、自立の道を描き出している。最後には、より高い段階へと導くべく、「帰還」というものが立ち現れる。とはいえその帰還は多くの場合——まったくもってリアルな——ある新しい結合の、否、ある新しい世代創出の基礎固めとなっている。

「お父さん、僕は世界へ打って出るべきだし、出なければならない。」親指小僧はこう言って、物語を自分の物語に作り替える。彼が降伏しなければならない数々の危険は、身の毛もよだつものである。しかし、彼の無邪気な大胆さが、幸福な結末を保証する。同様に、メルヒェン風の幸福な結末が、聞き手と読み手によく伝わる彼の無邪気さを保証するのである。

* * * * *

二つ目の適合性は②の「病と死」である。メルヒェンとはその構造にしたがえば、主人公または女主人公が、自分の望んだ状態に到達するまでに、一連の障害を克服しなければならないという一つの物語である。この定義からすれば、「病」というものが、主人公や女主人公の道を妨害する諸現象の一つとして、重要な位置価値を占めることが予期されるであろう。しかし事態はその反対である。病はほとんど起こらないのである。なぜか？

¹⁹ 注13参照。

身体的傷害というものがある役割を演じているメルヒェンを考慮に入れば、上記の見解に寄り添うことができる。つまり、さすがに病気とは解釈され得ない、身体的破損のことである。七羽のカラスのメルヒェン(KHM25)では、魔法にかけられた〔七人〕兄弟の小さな妹がガラスの山へとやって来るが、〔ガラス山の扉を開く〕鍵を持っていない。「いったいどうしたらいいのでしょうか？」と少女は問いかける。彼女は、熟慮に熟慮を重ねる。「善良な妹は手にナイフを取り、自分の小指を一本切り取り、それを扉に差し込むと、運よく扉が開いた。彼女はその中へ入ると、小人が出迎えてくれた。」その小人は少女に、破傷風の予防注射を支給するわけでも、傷用包帯を当てるわけでもない。血は流れておらず、身体的な苦痛や心理的負担がほのめかされることもなく、その指は、切り取られたまま置き去りにされる。

スイスのメルヒェン研究者マックス・リューティ (Max Lüthi, 1909-1991) は、メルヒェンの「平面性」について語っている。メルヒェンの登場人物は紙人形のようにであり、はっきりとした輪郭を与えられているのだが、奥行きを有さない。まさにそのことが、登場人物たちを幸福への導くことを可能にする。病というものは、いわゆる部分的で進行性の奇形現象であり、緩やかな衰退あるいは複雑な障害と見なされ、メルヒェンの中に居場所を持たない。メルヒェンにおいて、病はまた、健常者との偏差が描写されないところでは、滑らかで一義的である。オーストリアのメルヒェンで、王妃がウシっ子 (Kalberl) を出産するときなどがそうである。これは医学的な変形であるばかりでなく、かなりバツの悪いものである。つまり、ご近所さんたちは何と言うだろうか？しかしメルヒェンの中ではまったく問題ではない。ウシっ子は学校へ行き、特別に物覚えの良い優秀な生徒であることが明らかになる。「だが彼は、小学校だけでは満足しなかった。大学進学を望んだ！王妃はこう言った。『私のウシっ子ちゃん、それは無理ですよ。』」王妃は、ウシッ子を町へ行かせることになるなんて、

とても恥ずかしいと思った。しかしウシっ子は長いこと頼み込み、結局母親は彼を行かせてくれた。すると程なくしてウシっ子は、最も賢い教授たちよりも賢くなったとさ。」

このメルヒェンの舞台が、大学都市だったのかはわからない。そして、彼は、自分の学位を利用することもなく、新たな冒険を求めたのである。最後にこのウシっ子は人間へと変身する。変身は変身でも、徐々に変容する漸次な変身は、メルヒェンのたどる道ではない。メルヒェンの「平面性」に対応しているのは、以下の現象である。正しい治療薬のみが見出されなければならないこと、そして突然、多くは一瞬にして健康になること。つまりメルヒェンでは、命の水や魔法の薬草が治療薬であり、それに対して、近代の治療薬の広帯域作用とは、実に貧弱な作用でしかないのだ。

医者とは——このような実情に則して理解すれば——メルヒェンでは、まったくもって重要ではないのである。たいていの場合、医者が登場しても病気を理解していない。というのも、だいたい王女の恋の病だからだ（この病は今日に至るまで、医学の教科書において許しがたいほどなおざりにされているではないか）。論者の知識の及ぶ限りにおいて、比較的よく知られたメルヒェンの中で、成果のあった医者はただ一人である。そしてその者は、医学を修めていない治療師であり、おまけに珍しい助手を伴っている。そう、死神である。グリム兄弟は、自分たちのメルヒェン・コレクションに、死神の名付け親の話（KHM44）を収録したが、これは本来的な〔魔法〕メルヒェンではない。しかし、物語が現実を上回ることにより現実を解明してゆく、そんな物語^{ゲンヒテ}の一つなのである。

ある一人の貧しい男が、自分の十三番目の子供のために名付け親を探している。親愛なる神と悪魔の申し出を、彼は断る。彼は二人を不公平だと見なすのである。死神の申し出を彼は受け入れる。というのも死神〔つまり死というもの〕は、金持ちと貧乏人の間に何の区別もしないからだ。名付け親からの贈り物として、死神はその子供に一つ贈り物をする。それが

その子を、いずれ有名な医者にしてゆくのである。

名付けられた息子が病人のところに呼ばれると、彼にはもちろん死神が見える。死神がベッドの頭側に立てば、その病人は特別な魔法の薬草によって治療される。しかし、もし死神が病人の足元に立てば、あらゆる支援は無に帰する。この医療従事者は、この現象を頼りにする。そして彼は、的確な診断ゆえにあまりにも有名になり、それにとどまらず、病気の王女のところへと召されることとなった。彼は王女に恋をした。そして死神が彼女の足元に立っているのを見たとき、彼はその病人をぐるりと回転させて、足があったところに頭が来るようにしてしまう（本会議プログラムのワードにしたがえば、さながら状況転換による主要な妨害徴候の治療法とも言い得ようか）²⁰。王女はたちまち元気になる。しかし死神は、無情だがもっともなことに、この名付けられた息子と呼びつけるのである。

重病人は子供も大人も、メルヒェンを聞くことを好むということが、幾度となく報告されている。あるメンタルを患った者が、ニーチェを範にしつつこう表現している。「メルヒェンのおかげで私の憂鬱が、理想状態の隠匿と深淵の中に静まった。」おそらく死神との付き合いが、このような「理想状態の深淵」の蓋を外し、日常生活においてはむしろぼんやりとしたままではあるが、それがないと人生がむしろ定義できないような、そんな次元をもまた照らし出すのである。

しかしながらメルヒェンは——そしてこれは、メルヒェンが癒しの機能のを担いうる一つの理由でもあるのだが——深淵の蓋を開くのみならず、この深淵の上に橋が渡され、飛び越えられ、克服されえるという確信をももたらすのである。

* * * * *

²⁰ 本論考には、「ドイツ小児医学協会第80回会議」(80. Tagung der Deutschen Gesellschaft für Kinderheilkunde)との付記があり、もともとは講演原稿だったことが伺える。

三つ目の適合性は③の「幸福」である。メルヒェンには多くの意味があり、視界に入るのはいつもそれらのほんの一部である。我々がある一つの側面に固着し、それを唯一の本来的側面と把握しようと試みるや否や、メルヒェンそのものが飛び去って行き、別の側面が姿を現す。しかし、メルヒェンの存在意義（ここでは単数形！）を問うとすれば、その適切なキーワードとは、やはり「幸福」である。

メルヒェンは諸々の幸福のイメージを伝えてくれる。それはつまり、メルヒェンが現実から芽生えさせた、現実と対になる諸々のイメージ（Gegenbilder）である。腹をすかせた若い少女が、テレージェンシュタットの強制収容所²¹で、たった二つの文章でメルヒェンを書き記した。「昔あるところに一人の王様があり、腹をすかせていた。彼は〔ガス窯の点火〕スイッチのところへ行って、『二回だね』と言った。」書き記すことすらはばかられた〔願望〕実現が、この文章に封じ込められている。このジャンルに与えられた真実性なるものが、明文化による幸福の表現を断念させている。つまり、メルヒェンはいつも、幸福というものから定義されるということだ。

ほとんどのメルヒェンは、いかに艱難辛苦の道のりが刻印されたとしても、長持ちするよう設えられた「ハッピーエンド」に向けて針路を取る。幸福な結婚の後、王国の獲得の後、あるいは主人公〔英雄〕の解放の後、いったい何が起こるのかと尋ねる者の振る舞いは、確かに現実^{ポエジー}に即してはいるものの、メルヒェンというジャンルを損なってしまうことになる。メルヒェンは、幸福の安定性を起点としている。というのも、メルヒェンは現実の小道具や現実性の諸要素を確かに受け取りはするが、それに縛られたままではないからである。メルヒェンは嘘をつかない。それは詩だからだ。そして一つの戯れであり芝居なのである。メルヒェンが戯れであり続ける限

²¹ ナチスドイツが現在のチェコ領テレージン（ドイツ名：テレージェンシュタット、Theresienstadt）に1941年に設けた大規模なユダヤ人強制収容所。

り、そしてあるたった一つの世界観の表現というご指名を受けない限り、メルヒェンが嘘をつくことはない。

メルヒェンとはその結末によって、はじめから規定されている。幸福というのは、確かに結末になってはじめて出現するものではあるが、物語られた冒険はすべて、さまざまな幸福状態の重みを、結末から逆に授けられているのである。

幸福はいつも、一つの物語^{ゲシヒテ}を有している。現実の幸福もしかりである。それだけ強調されて出現するのが幸福である。幸福は無前提ではなく、明確なプロセスから生じている。ジグムント・フロイトは、このプロセスの構造と共に、幸福の厳密性をも特徴付けた。「最も厳密な意味において人が幸福と呼ぶものはむしろ、ぎりぎりまでせき止められた欲望の突然の解放に相当し、その本性にしたがえば、エピソード風の現象としてのみ存在する。快楽原則によって希求された一つの状況がそれぞれ持続し、その持続が、ほんわかした安楽の感情を生み出すだけなのだ。その対比^{コントラスト}を徹底的に、その状態をほんのわずかばかり楽しむことができるよう、我々は十分適合させられているのである。」

この特徴付けは、身体の健全の最高潮をねらっており、明らかに一般化が可能である。このモデルはさらに、メルヒェンの幸福へも応用可能である。メルヒェンの幸福は、緊張から解放されたある持続的状态を設定しようと試みる。そして、メルヒェンという戯れの形式に巻き込まれる者は、このあらゆる現実を凌駕する幸福の法則を受け入れる。しかし、メルヒェンの幸福もまた、一つの対比^{コントラスト}現象にすぎない。そしてこの対比^{コントラスト}現象が成立するのは、この幸福の中で我々が、本来的なメルヒェン・ストーリーの特徴をなす窮乏の克服や、危険と敗北に共感するからである。

幸福感情というのは、メルヒェンの登場人物が引き受ける数々の骨折りと共に芽生える。しかし、それらはいつも、すでに軽減が約束されている骨折りである。というのも、メルヒェンの主人公たちは、「幸運の膜^{ぼうし}」²²

を有しており、万事が結局うまくいくことになっている「幸福の子供たち」（Glückskinder）なのである。彼らは超人的なことを成し遂げなければならず、彼らの苦勞と緊張がそれぞれの度量を越えてしまう。しかしそれらは、いわば空中浮揚の領域において生じている。個々の困難は、メルヒェンという物語全体^{ゲシヒテ}の無重力²³の中で帳消しになる。

多くにメルヒェンにおいて——ここで再びメルヒェン批評家たちに相應の権利が認められるのであるが——幸福の持続状態は、モラルの持続状態へと置き換えられる。灰かぶり（KHM21）は幸福である。というのも、彼女は辛抱強く謙虚だったからだ。ガチョウ番の娘（KHM89）は幸福である。というのも、彼女は文句を言わず自分の仕事を成し遂げ、自分の秘密を洩らさなかったからだ。金の乙女は幸福である。というのも、彼女はホレおばさん（KHM24）のもとでよく働いたからだ。そのようなメルヒェンがいつも決まって、それまでとはまったく別様に表現されてしまうのも無理からぬことだ。たとえばホレおばさんはごく最近、母権制の異教〔＝非キリスト教世界〕の女神へと格上げされただけでなく、労働倫理^{モラル}という別の根本原理に照らされている。ロルフ・クレンツァー（Rolf Krenzer, 1936-2007）はある詩の中で、新しいホレおばさん像を呈示している。

大きな家の老女

家事の手伝いを見張る。

哀れな少女のなんとまともなこと。

愚かで有能、それは重要なこと！

労働組合未契約

²² ドイツ語で Glückshaut といい、出産時に新生児の頭を稀に覆っている羊膜のこと。民間伝承では幸運の印とされる。

²³ マックス・リュートィによる、メルヒェン世界の「平面性」という解釈へと再びつながってゆく。

ゆえに多くの超過勤務産出。
一人目の姉妹、愛らしくかわいらしい
ささやかな謝礼、それは金。

大きな家の老女
家事手伝いをまた見張る。
二人目の少女は哀れだがあざとい。
思うに「ここでは搾取されている！
ベッドをゆすって、掃除に料理、
もちろん週四十時間だけ。」
二人目の姉妹、こざかしい
ベトベトで残念。²⁴

これは、のびのびとした戯れであり、メルヒェンの価値に疑問を投げかけている。しかし、メルヒェンという形式は、そのような進撃によって、軸からそれてしまうものではない。その骨子を怪しいモラルへ譲渡してしまうことが、このメルヒェン形式にとっての必然というわけではない。グリム・コレクションのあまり知られていない一連のメルヒェンなら、なおさらのことである。さまざまな地域の民によって直接伝承されたメルヒェンでは、モラルを通じて幸福が獲得されることはほとんどない。100年以上前〔19世紀前半〕、東洋学研究者のエルンスト・マイヤー（Ernst Meier, 1813-1866）が、チュービンゲン周辺地域で一つのメルヒェンを書きとどめた。その冒頭は、敬虔主義²⁵の信心の歴史のごときしつらえである。しかしそこから、変てこなサル王さまと美しい少女との多彩な冒険がはじ

²⁴ この詩行はドイツ語の Pech のみ。英語のピッチに相当し、瀝青、コールタールと訳されることもあるが、同時に「不運」や「災難」も示しうる。ここではオノマトペで表現し、「残念」を入れた。

まるのである。その少女はすぐに主人公の子供を身ごもることになり、まさにそれで彼女は救済される。さて、ここにモラルはあるのだろうか？このような物語^{グシヒテ}の実際のモラルとは、結局幸福のことなのである。

おそらくこのような物語は、お行儀と服従とが賞賛されるメルヒェンよりも教育性に乏しく、現実性にもまた乏しい。メルヒェンというジャンルは、「現実感覚」(Wirklichkeitssinn)ではなく、いわゆる「可能性感覚」(Möglichkeitssinn)に組み込まれるべきものである。この「可能性感覚」をロベルト・ムージル (Robert Musil, 1880-1942) は、「同様に善であり得るすべてのものを想定し、存在しないものを、存在しているものと同等と捉える」ための素質として定義した。

実際はこうである。メルヒェンとは、拘束されたある一つの現実を美化する黄金の鳥かごであるだけでなく、その鳥かごから脱出する鳥でもある。その鳥は、^{ファンタジー}空想の自由空間へと飛び立ち、意味なんて糞くらえと奏でる。そしてそれもまた、メルヒェンの意味の一部分なのである。

【訳者解説】

翻訳したテキストは以下の通りである。Hermann Bausinger: Zur Bedeutung der Märchen. In: Monatsschrift Kinderheilkunde (Zeitschrift für Kinder- und Jugendmedizin; Organ der Deutschen Gesellschaft für Kinderheilkunde; Organ der Österreichischen Gesellschaft für Kinderheilkunde) 133 (1985), Heidelberg: Springer Medizin-Verlag, S. 322-326. (ヘルマン・パウジンガー: 「メルヒェンの意味について」、所収「週刊小児医学」〔ドイツ小児医学協会機関誌、オー

²⁵ ルター²⁵の宗教改革、特に説教に耳を傾けるだけになっていったルター派に対し、フランクフルト・アム・マインの牧師フィリップ・シュペーナー (Philipp Spener, 1635-1705) が説いた思想であり、ドイツ語で Pietismus。信者個々人の内面的心情を重視し、それぞれの積極的役割や禁欲主義が特徴的である。テュービンゲンが位置するバーデン＝ヴュルテンベルク州 (かつてのヴュルテンベルク王国) は特に敬虔主義が広まった地域であり、テュービンゲン大学神学部教授にも歴代数々の敬虔主義者が就任した。

ストリア小児医学協会機関誌] 第133号、ハイデルベルク:シュプリンガー医学出版、1985年、322-326頁。)

ヘルマン・バウジンガーは1928年にアーレンに生まれ、1947年よりテュービンゲン大学でドイツ文献学、民俗学、歴史学を専攻し、論文「生き生きとした伝承—ヴュルテンベルク北東地域における調査に基づいた民間伝承遺産の生に関する考究」(Lebendiges Erzählen. Studien über das Leben volkstümlichen Erzählgutes aufgrund von Untersuchungen im nordöstlichen Württemberg.)で、1952年に学位を取得する。1959年には、論文「科学技術世界の民衆文化」(Volkskultur in der technischen Welt、刊行は1961年)で教授資格取得、1960年より同大学教授に着任する。

今となっては、民俗学者よりは社会学者として知られていると言っても過言ではない。ドイツ文献学から伝承文学研究を経て、従来の民俗学における研究対象の限界に早くから気付いたバウジンガーは、古風でクラシックな伝承や伝統が薄れゆく原因として、頻繁にやり玉に挙がる科学技術そのものに着目する。1977-83年にはドイツ民俗学会会長を務め、1992年にテュービンゲン大学を退職した後も、学内のルートヴィヒ・ウーラント・経験文化学研究所における後進の育成に今なお努めている。

訳者は、1991年冬学期／1992年夏学期というバウジンガー教授退職直前の年、日本の文部省の国費留学生として、そのゼミナールに席を置く幸運に恵まれた。その後、ドイツ学術交流会(DAAD)奨学金への応募の際には、『メルヒェン百科事典』編纂所のあるゲッティンゲン大学のロルフ・ブレードニヒ氏を紹介していただいた。2015年11月25-26日にゲッティンゲン大学で開催されたメルヒェン百科事典完成記念会議「Homo Narrans——語りの中の人間とその世界——」に参加した際に、偶然バウジンガー教授と再会し、その後、氏の教えを直接乞うべくテュービンゲンへと定期的に通うこととなった。2019年3月1日、同氏の1960年の著書『^{フォルクスポエジー}民の詩』の諸形式』(Formen der Volkspoesie)の第Ⅲ章第2節を「九州ドイツ文学」

に訳出し²⁶、その抜き刷りを携え翻訳完了報告に伺った。その折りに氏より、自身のメルヒェン研究小論文を翻訳し、アンソロジーを出版してみないかと提案され、A4サイズの紙を一枚渡された。そこには、パウジンガー氏の10篇の小論文がピックアップされていた。本論考は、その第一章に位置付けられたものである。以後、このメルヒェン・アンソロジーの完成をめざし、翻訳をたゆまず続けていくつもりである。この場を借りて、ヘルマン・パウジンガー氏に心からの謝意を表したい。

さて、本論考の翻訳作業中に、パウジンガー氏があのエルnst・ブロッホと対話されていたことに気付いたのは、注16に記した通りである。本論考が執筆された1985年から35年という長い月日を経て、「カセットテープ」（注4）や「電信電話」から、「インターネット」の時代となった。「本論考に登場するエルnst・ブロッホ氏について、思い出などを教えていただくことはできませんか？」とEメールで尋ねてみたところ、「お急ぎのようですね」と以下の即レスが返ってきた。

ときどき大学内でエルnst・ブロッホ氏には会いましたが、ほんの少しの言葉を交わす程度でした。彼は、私が贈った『メルヒェン百科事典』の執筆項目の抜き刷りに、感謝していました。その際彼は、自分の著作がしばしば一括受容されるにとどまり、各専門分野〔の専門家たち〕は自分の著書のディテールについてほとんど気付いていないということを指摘していました。さて、私の彼に対する主な批判点は以下の通りです。彼がメルヒェンを「どのみち反抗的」（allemaal rebellisch）であると特徴付け、根本的には「反乱」（Revolte）と見なしていたこと。しかし彼はそれに同意しませんでした。彼との頻繁な接

²⁶ 大野寿子（訳）：「メルヒェン」について——『^{フォルクスボエジェ}民の詩』の諸形式』第Ⅲ章第2節より——（ヘルマン・パウジンガー著）（2018年10月31日、九州大学独文学会「九州ドイツ文学」第32号、31-50頁。）

触を、私はそんなに求めませんでした。彼の名声に物怖じしたのだと思います。プロッホはとにかく国際的に著名であり、その業績が多くの議論の場で脚光を浴びていましたので。私のこの「引っ込み思案」は、やはり自身の小市民的性格に起因していました。つまり、私には「學術畑」の両親がいたわけでもなく、古典教養系ギムナジウム（humanistisches Gymnasium）の出でもなく、第二次世界大戦時の出征と捕虜経験で、修学期間も短縮されていたので。私にとって大切なのはむしろ、プロッホの作品との対峙そのものでした。彼の死後、私は一本の論文を刊行しました。その中で私は、まさにチュービンゲン大学の同僚たちの一方的に神学的な解釈に対して反駁したのです。（さて、ここに綴ったものすべてが、この翻訳のコメントにふさわしいかどうかは疑問です。これは貴女が判断しなければなりませんね。）

ヘルマン・バウジンガー氏は、1975年に刊行された『メルヒェン百科事典』第1巻から、共編者として執筆を担当されている。エルンスト・プロッホは1977年に亡くなっているので、このエピソードは1975-77年の話となり、大変貴重で感慨深い。バウジンガー氏の思いに寄り添いながら、丁寧に訳出させていただいた。改めて深謝申し上げる。

【著者より翻訳によせてのご挨拶】

「メルヒェン」とは国際的なジャンルです。それらは世界の多くの地域において、文学の基本要素に属し、口頭伝承の物語をもたびたび形成します。しかし、それらはどこでも同じというわけではなく、多くの国においては、自身の文化にとりわけ典型的なものに見なされるようになりました。徐々にではありますが物語研究は比較作業に推進し、一方では民族間の相違を見つけ出し、他方では、内容的特徴と特にその構造がしばしば同系であることを示したのです。そのようなメルヒェン様式（Mär-

chengestaltung) の自由さが導き出したのは、類似のモチーフが世界中で検出されうるという事実です。生活様式の位置関係の諸問題とよく一致します。そして、想像力ファンタジーの夢想なるものが、それにふさわしい表象イメージを導くのです。

日本の昔話研究では、ヨーロッパの調査にも有益な視点が育まれ、逆に、日本では「西洋的な」分析方法も注意深く継承され、注目されてきました。ドイツ語で記され、5年前に完成した『メルヒェン百科事典』全15巻は、ドイツ以外での購買者を、ほとんど日本で見つけたようです。

幸いなことに、この物語研究の相互の活性化や育成は続いています。Hisako ONO は自身の業績の中で、ドイツ・メルヒェンの継承性へと通ずる道を開いただけでなく、彼女独自の力点をも伴いながら、ヤーコプとヴィルヘルムのグリム兄弟に強く刻印されているドイツ・メルヒェンという伝承の理解に寄与しました。メルヒェンの意義と意味に関する拙文の翻訳と紹介に、彼女が着手してくれたことに大変感謝しています。本著は個々の見識に基づいてはいますが、メルヒェンの全体像をねらっています。その全体像が、外的および内的隔たりをものともせず、日本の伝承文学にも一定の妥当性を有することを願っています。

2021年1月11日、ロイトリンゲンにて

Hermann Bausinger